

木曾の怪物

——「日本妖怪実譚」より

岡本綺堂

青空文庫

これは亡父の物語。頃は去る明治二十三年の春三月、父は抛よんどころなき所用あつて信州軽井沢へ赴おもいて、凡そ半月ばかりも此の駅しゆくに逗留とどまっていた。東京では新曆の雛の節句、梅も大方は散ちりつ尽つくした頃であるが、名にし負う信濃路は二月の末から降ふりつづく大雪で宿屋より外へは一歩ひとあしも踏出されぬ位、日々炉を囲んで春の寒さに顫ふるえていると、ある日の夕ぐれ、山の獵師が一匹、鹿の鮮血なまぢ滴るのを担いで来て、何うか買つて呉れという。ソコで其の片か股たもとだけ買う事に決めて、相当の価あたいを払い、若も暇ならば遊びに來いと云うと、田舎漢いなかものの正直、其の夜再び出直して來た。此方こつちも雪に降籠められて退屈の折柄、其の獵師と炉を囲んで四方山の談話はなしに時を移すと、獵師曰く、私は何十年來この商売を為していますが、この信州の山奥では時々不思議な事があります、私共の仲間では此れを一口に『怪物えとも』と云いまして、猿の所為しわざとも云い、木霊こだまとも云い、魔とも云い、その正体は何だか解りませんが、兎にかく怪しい魔物が住んでいるに相違ありません。と、冒頭まくらを置いて語り出したのが、即ち次の物語だ。因ちなみに記す、右の獵師は年のころ五十前後で、いかにも朴訥はつたくで律儀りぎらしく、決して嘘などを吐くような男でない。

昔からのお噺はなしをすれば種々いろいろあるが、先ず近い所では現に三四年前、私が二人の仲間と

一所に木曾の山奥へ鳥撃に出かけた事がある。そういう時には、一日は勿論、二日三日も山中を迷い歩く事があるから、用心の為に米または味噌、鍋釜の類まで担いで行く。で、日の暮れかかる頃、山奥の大樹の蔭に休んで、ここに釜を据え、有合う枯枝や落葉を拾つて釜の下を焚付け、三人寄つて夕飯の支度をしている中、一人が枯枝を拾う為に背後の木かげへ分入ると、ここに大きな池があつて、三羽の鴨が岸の浅瀬に降りている。這奴、幸いの獲物、此方が三人に鳥が三羽、丁度お誂え向だと喜んで、忍び足で其の傍へ寄ると、鴨は人を見て飛ばず驚かず、徐かに二足ばかり歩いて又立止る、この畜生めと又追継ると、鴨は又もや二足ばかり歩む、歩めば追ひ、追えば歩み、二三間ばかりも釣られて行く時、他の一人が此の体を見て、オイオイ止せよ、例の怪物に相違ねえよと、声をかける。成程と心付いて其のまま引返して、私に其の嘸をするから、ハテ不思議だと三人一所に、再び其の木かげへ往つて見ると、エエ何の事だ、鴨は扱措いて、第一に其の池もない、扱はいよいよ怪物の所為だと、猶能くよく四辺を見ると、其の辺は一面の枯草に埋つていて、三間ばかり先は切ツ立の崖になつていたので、三人は思わず悸然として、若もウカウカと鴨に釣られて往こうものなら、此の崖から逆落しに滑り落ちるに相違なく、飯え生命に別条ないとしても、屹と大怪我をする所だ、アア危いと顔を見合せて、旧の処へ引

返すと、釜の下は炎々と燃^{もえあが}上^あつて、今にも噴^{ふきとば}飛^としように釜の蓋がガタガタ跳^{おど}つてゐる。ヤア飯が焦げるぞと、私が慌^{あわ}てて其の釜の蓋を取ると、中から湯気が真白に噴^{ふきとば}上げる、其の煙の中に大きな真青な人間^{ひと}の顔がありありと現^{あら}われたから、コリヤ大変だいいよいよ怪物だと、一生懸命に釜の蓋を上から押えて、畜生、畜生ッ、オイ早く鉄砲を撃てと怒鳴る。他の二人も心得て、何処^{あて}を的^{あて}ともなしにドンドン鉄砲を撃つこと二三発、それから再び釜を覗いて見るとモウ何物^{なんに}も見えない。

山又山の奥^{わけい}ふかく分入^{わけい}ると、斯^こういう不思議が毎々あるので、忌々しいから何^どうかして其の正体を見とどけて、一番退治して遣^やらうと、仲間の者とも平^{つねづね}生^ね申^ま合^あせてゐるけれども、今に其の怪物の姿を見現^{あら}わした者が無いのは残念です。モウ一つ不思議なのは、これも二三年前の事、私が木曾の山の麓^{ふもと}路^ぢを通ると、商^{あきんど}人らしい風俗の旦那と手代二人が木かげに立つて珍らしそうに山を見あげてゐるから、モシモシ何を御覧なされると近寄つて尋ねると、旦那らしい人が山の上を指さして、アレ御覧なさい、アノ坊さんの担いでゐる毛鑷^{けぬき}の大きい事、実に珍らしいと云う。ハテ可怪^{おかし}な事をいうと思ひながら、指さす方を見あげたが、私の眼には何物^{なんに}も見えない。扱^あは例の怪物だと悟つたから、この畜生めツと直ぐに鉄砲を向けると、其の人は慌^{あわ}てて私の手を捉え、アアモシ飛^{とん}だ事を為さる、アノ坊

さんに怪我でも為せては大変ですと、無理に抑留める。で、其の人の云うには、私は上田の鉄物商兼研職で、商売用の為め今日ここを通ると、アノ坊さんが大きな毛鑷を引担いで山路を登って行く、私も親の代から此の商売をしてるが、あんなに大きな毛鑷を見た事がないから、奉公人も私も肝を潰して見ている所だとの事。併しそんな事のある筈もなく、私の眼には一向見えないのが第一の証拠、あれは例の怪物に相違ないと、委しく云って聞かせると、其の人達も驚いた様子で、成程そう云えばモウ其の坊主の姿は見えないとなつたと云う。何しろ憎い畜生め、今日こそは退治て呉れようと、鉄砲を小脇に其の山路を一散に駈あがり、其処かここかと詮議したけれども、別に怪しい物の姿も見えないからアア残念ナと再び麓へ降りて来ると、彼の商人はモウ立去つたと見えて、其処には誰も居ない。で、其の商人は本当の人間で、全く怪物に化されたものか、但しは其の商人が怪物で、私に無駄骨を折らせたものか、何方が何うとも今に分らぬけれども、何方にしても不思議な事で、私も流石に薄気味が悪くなつて、その日は其のまま帰つて了つたが、私ばかりでなく、仲間の者も折々に斯ういう目に遭いますから、山へ出る時には用心を為にやあなりません、云云。

(麴生)

(「文芸倶楽部」明治三十五年七月号掲載「日本妖怪実譚」より)

青空文庫情報

底本：「伝奇ノ匣² 岡本綺堂妖術伝奇集」学研M文庫、学習研究社

2002（平成14）年3月29日初版発行

底本の親本：「文芸倶楽部 日本妖怪実譚」

1902（明治35）年7月

初出：「文芸倶楽部 日本妖怪実譚」

1902（明治35）年7月

※初出時の署名は「麴生」です。

※表題は底本では、「木曾の怪物《えてもの》」となっています。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2008年9月23日作成

2013年8月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木曾の怪物

——「日本妖怪実譚」より

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>